

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33939

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19258

研究課題名（和文）がん終末期ケアを担う訪問看護師のピアサポートプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a peer support program for home care nurses providing terminal care for cancer

研究代表者

森 京子（MORI, Kyoko）

名古屋学芸大学・看護学部・講師

研究者番号：90453084

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、がん終末期ケアを担う訪問看護師のピアサポートプログラムを開発することを目的とした。文献検討を通して、がん終末期ケアの中でも看取りに伴う悲嘆の積み重ねが訪問看護師の自己効力感を低下させ、ケアの質の低下やバーンアウトにつながると示唆を得た。これを踏まえ、がん終末期ケアの中でも「看取り」に焦点をあて訪問看護師へのインタビュー調査を行い、ピアサポートプログラムを構成する要素を抽出した。さらに、訪問看護師への質問紙調査を行い、ピアサポートの実施状況と自己効力感の関連性を明らかにした。以上の研究成果を統合し、ピアサポートプログラムの草案を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、がん終末期ケアを担う訪問看護師へのサポートについて検討し、がん終末期ケアの中でも看取りに関わる看護師への支援が重要である。特に小規模事業所の訪問看護師へのサポートが不足している。ピアサポートの実施では、通常の訪問に支障がない、利害関係がない、ネットワークづくりにつながることが求められる。看護師間で振り返りを行うだけでなく、感情を共有し、互いの看護実践を肯定することにより、訪問看護師の自己効力感を高め、バーンアウトの予防につながる可能性がある、という新たな知見を得た。これらはがん終末期ケアを担う訪問看護師への支援体制を整備し、質の高いケアを提供するために重要な知見である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a peer support program for home care nurses who provide end-of-life cancer care. Through a literature review, it was suggested that among end-of-life cancer care, the accumulation of grief associated with end-of-life care decreases the self-efficacy of home care nurses, leading to a decrease in the quality of care and burnout. Based on this, we conducted an interview survey of home care nurses focusing on "end-of-life care" among terminal cancer care, and extracted elements that constitute a peer support program. Furthermore, we conducted a questionnaire survey of home care nurses to clarify the relationship between the implementation of peer support and self-efficacy. The results of the above studies were integrated to create a draft of the peer support program.

研究分野：がん看護、地域・在宅看護、エンドオブライフケア

キーワード：がん終末期 訪問看護師 看取り ピアサポート

1. 研究開始当初の背景

患者を看取するという経験は、時に無力感や深い悲しみを伴い、医療者の自己効力感を低下させる。デスカンファレンスは看取りに伴うストレスや悲嘆の軽減に有効であるが、在宅医療の現場において多職種が一堂に会しデスカンファレンスを行うことは困難を伴う。特に、訪問看護師においては、事業所の約半数が小規模事業所であることから、デスカンファレンスへの参加や事業所内での実施は容易なことではない。そのため、訪問看護師は看取りに伴う感情を表出することができず、様々な困難を抱えたまま看取りの体験を繰り返している。特に、がん終末期の場合は、高齢者やがん以外の慢性疾患の終末期に比べ、在宅での療養期間が短く、療養者やその家族との関係性の構築と並行して、終末期ケアを進めなければならない難しさがある。そのため、看取った後も「あれで良かったのか」と不全感を抱くことが多く、訪問看護師の自己効力感を低下させ、バーンアウトにつながりかねない。

本研究において、がん終末期ケアの担い手である訪問看護師を対象としたサポートプログラムを開発することは、訪問看護師が抱く、無力感や悲しみを軽減し、自己効力感の低下に伴うバーンアウトの回避に貢献できると考えた。

2. 研究の目的

在宅医療の現場においてがん終末期ケアを担う訪問看護師をサポートするためには、どのような内容が必要であるのか、どのような方法が有効であるのかを明らかにし、「がん終末期ケアを担う訪問看護師のピアサポートプログラム」を開発する。

3. 研究の方法

第1段階では、国内外の先行研究の検討を行った。また、がん終末期ケアを担う訪問看護師を対象に半構造化面接を実施し、がん終末期療養者を看取る訪問看護師に対するサポート内容および方法について検討した。第2段階では、第1段階での研究成果を基に、ピアサポートプログラムの構成要素を抽出した。第3段階では、より臨床にとって有益なプログラムを開発するため、質問紙調査を追加で計画した。がん終末期ケアを担う訪問看護師を対象に質問紙調査を実施し、ピアサポートの実施状況の把握と自己効力感の関連について検討した。以上の研究成果を統合し、ピアサポートプログラムの草案を作成した。

4. 研究成果

(1) 第1段階：国内外の先行研究の検討および半構造化面接によるがん終末期ケアを担う訪問看護師に対するサポート内容・方法の検討

文献検討を行ったところ、国内文献においては、がん終末期ケアを担う訪問看護師に対するサポートに関する報告は見当たらなかった。訪問看護師は、療養者とその家族に対しケアを提供する存在であり、サポートを受ける対象として捉えられていない可能性が示唆された。また、がん終末期ケアの中でも看取りに伴う悲嘆の積み重ねが訪問看護師の自己効力感を低下させ、ケアの質の低下やバーンアウトにつながると示唆された。

半構造化面接は、8施設10名の訪問看護師を対象に実施した。がん終末期療養者を看取る訪問看護師が受けているサポートおよび必要なサポートの内容を明らかにするとともに、訪問看護師にとって有効な看取り後の振り返りについて検討し、以下の研究成果を得た。

がん終末期療養者を看取る訪問看護師が受けているサポート

がん終末期療養者を看取る訪問看護師が受けているサポートとして、【看取りケアに対する客観的かつ具体的助言】、【看取りケアに対する肯定的評価】、【看取りに伴う葛藤の分かち合い】など7つのサポートが示された。訪問看護師は看取りケアの基盤となるサポートである【チームで看取る体制整備】を土台とし、【看取りケアに対する客観的かつ具体的助言】、【看取りケアに対する肯定的評価】などの看取りケアの質向上につながるサポート、【看取りに伴う葛藤の分かち合い】、【自分らしくいられる場の確保】といった看取りケアを担う訪問看護師の自効力感保持につながるサポートを受けていることが明らかになった。

がん終末期療養者を看取る訪問看護師が必要とするサポート

がん終末期療養者を看取る訪問看護師は、【看取りを振り返る機会の保障】、【看取りケアの質を高める支援】、【看取りを支えるチームの醸成】、【看取る看護師の自己効力感を保持する支援】の4つのサポートを必要としていることが示された。

訪問看護師が有効と考えるがん終末期療養者の看取り後の振り返り

がん終末期療養者の看取りに関わる訪問看護師が有効と考える振り返りの機会では、【実践し

た看取りに対する承認と示唆が得られる】ことが求められる。その実施においては【通常の訪問計画に支障がない】ことが挙げられ、参加において【利害関係がない】ことや【ネットワークづくりにつながる】ことが望まれていることが示された。

(2) 第2段階：ピアサポートプログラムの構成要素の抽出

第1段階の研究成果を基にピアサポートプログラムの構成要素を抽出した。抽出した構成要素について、がん看護学、在宅看護学を専門とする研究者および、訪問看護事業所の施設管理者、がん終末期ケアを担う訪問看護師間で検討し、最終的に【看取りの経験の振り返り】、【看取る看護師の自己効力感の保持】に関する各8項目、【看取りケアの質向上】、【看取りを支えるチームの醸成】に関する各10項目の計36項目を確定した。

(3) 第3段階：ピアサポートの実施状況の把握と自己効力感の関連の検討

質問紙調査は、東海地方の訪問看護ステーション協議会会員施設のうち、各都道府県の介護サービス情報公表システムにおいて「看取りあり」と登録されている訪問看護事業所に所属し、在宅でがん終末期療養者の看取りを経験したことがある訪問看護師を対象に実施した。562施設に所属する訪問看護師1,686名に配布し、320名(回収率19.0%)から回答を得た。未記入であった1名を除いた319名(有効回答率18.9%)を分析対象とした。

対象者の属性

対象者の年代は40代と50代で75.6%を占め、常勤の割合は88.1%であった。67.4%の訪問看護師が残業を行っており、直近1週間の残業は平均4.0時間であった。オンコール当番は平日と休日を含めて15.1%の訪問看護師が行っており、直近1ヶ月では平均9.2回であった。訪問看護師の経験年数は平均7.6年、がん看護の経験年数は平均11.9年、がん療養者の看取り件数は年間平均8.9件であった。さらに所属事業所の規模は平均6.8人であった。

一般性セルフ・エフィカシー (General Self-Efficacy Scale : GSES) 得点

GSES得点の分布範囲は、0~16点、平均 6.9 ± 2.6 点であった。GSES得点と看護師経験年数および訪問看護師経験年数の相関は認めなかった ($r=0.030$, $p=0.591$; $r=0.009$, $p=0.877$)。

ピアサポートの現状

ピアサポートの現状として、訪問看護師が、主治医やケアマネージャーなど多職種との関係を構築し、看取りを支えるチームの醸成に積極的に取り組んでいることが示された。その一方で、所属施設外において看取りの経験を振り返ることや、看取りケアの質向上に係る取り組みは十分とは言えない現状が示された。

ピアサポートの実施状況と自己効力感との関連

ピアサポートの実施状況と自己効力感との関連では、「週に1回程度、看護師間でケース検討を行い患者・家族との物語を語り合う」ことや、「所属施設外の訪問看護師と互いの看取りの看護実践を肯定する」こと等が関連していた。

まとめと今後の課題

本研究は、がん終末期ケアを担う訪問看護師のピアサポートプログラムを開発することを目的とした。2025年には団塊の世代が後期高齢者となり、今後ますます在宅医療・訪問看護への期待が高まる。質の高いケアを提供し、人々が住み慣れた地域で自分らしく最期まで過ごすことができるように支えていく上で、がん終末期ケアを担う訪問看護師への支援体制の整備は喫緊の課題である。

本研究において、がん終末期療養者を看取る訪問看護師の中でも特に小規模事業所に所属する訪問看護師へのサポートが不足していることが明らかになった。ピアサポートの実施においては、通常の訪問に支障がないことだけでなく、利害関係がないこと、ネットワークづくりにつながることが求められることが明らかになったことは、注目すべき点である。これは、わが国の訪問看護事業所の約半数を小規模事業所が占めていることを反映した結果であると考えられる。

また、ピアサポートの実施状況と自己効力感との関連においては、「週に1回程度、看護師間でケース検討を行い患者・家族との物語を語り合う」ことや、「所属施設外の訪問看護師と互いの看取りの看護実践を肯定する」ことと自己効力感との関連が示された。看護師間でのケース検討を通して、振り返りを行うだけでなく、感情を共有し、互いの看護実践を肯定することにより、がん終末期ケアを行う訪問看護師の自己効力感を高め、バーンアウトの予防にもつながると考えられる。

今後、本研究で得られた成果を基に、小規模事業所の訪問看護師に特化した内容のプログラムの開発を進める。また、ピアサポートシステム活用の促進要因・阻害要因を解明し、約半数が小規模事業所であるわが国の現状に即した訪問看護師の支援体制の構築を目指し、さらなる研究を行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 森 京子、古川 智恵	4. 巻 29
2. 論文標題 がん終末期療養者を看取る訪問看護師が受けているサポート	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本看護福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森 京子、古川 智恵	4. 巻 90
2. 論文標題 がん終末期療養者を看取る訪問看護師が必要とするサポート - ピアサポートプログラムの開発に向けて -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本健康学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森 京子、古川 智恵	4. 巻 13
2. 論文標題 在宅でのがん終末期療養者の看取りにおける有効な振り返り - 訪問看護師の視点から -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本在宅看護学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森 京子、古川 智恵	4. 巻 25
2. 論文標題 がん終末期療養者を看取る訪問看護師に対するサポート	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 49-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森 京子、古川 智恵
2. 発表標題 がん終末期療養者を看取る訪問看護師間のピアサポートの現状
3. 学会等名 日本がんチーム医療研究会第33回研究集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森 京子、古川 智恵
2. 発表標題 がん終末期療養者を看取る訪問看護師に対するピアサポートプログラムの開発に向けた取り組み
3. 学会等名 日本がんチーム医療研究会第33回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森 京子、古川 智恵
2. 発表標題 がん終末期療養者を看取る訪問看護師間のピアサポートと自己効力感の関連
3. 学会等名 第29回日本緩和医療学会学術大会・第37回日本サイコオンコロジー学会総会合同学術大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森 京子、古川 智恵
2. 発表標題 がん終末期患者を看取る訪問看護師に対するサポート
3. 学会等名 第12回日本在宅看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森 京子、古川 智恵
2. 発表標題 がん終末期ケアを担う訪問看護師のピアサポートプログラム開発のための基礎的研究 訪問看護師にとって活用可能な振り返りの在り方
3. 学会等名 第30回日本がんチーム医療研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	古川 智恵 (FURUKAWA Chie) (20742513)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------